

がん教育に関する当事者の意識調査

～子どもと親の意識の比較～

小林真理子（放送大学大学院臨床心理学プログラム）

井上 実穂（国立病院機構 四国がんセンター）

白石 恵子（国立病院機構 九州がんセンター）

大沢かおり（東京共済病院／NPO法人Hope Tree 代表）



研究目的

- ・ 2018年3月9日閣議決定により第3期がん対策推進基本計画において「がん教育の推進」が盛り込まれ、学校におけるがん教育が始まった。
- ・ がん教育を実施する際には、がんに罹患した家族を持つ子どもへの配慮が必須である。
- ・ 本研究では、当事者であるがんになった親とその子どものがん教育に対する意識や経験を把握し、望ましいがん教育について考えることを目的とする。
- ・ 第26回学術大会では、子どもと親へのアンケートについて、各々量的分析結果を報告した。今回は、両者に共通する項目の質的分析を通して、がん教育に関する子どもと親の意識の比較を行う。

方法

【調査対象】がんの親を持つ子ども(小学4年生～高校生)およびその親

【調査方法】NPO法人HopeTreeのサイト、患者会等を通して協力者募集。
がん教育に関する経験や意識、配慮等についてのアンケート調査を無記名、郵送法にて実施した。

【調査期間】2020年2月～9月

【倫理的配慮】放送大学研究倫理委員会の許可を得て実施した。

【分析対象】小学生用:21通、中高生用:44通、親用:55通が回収された。
(回収率:30%/62%/60%)

【分析項目】3つの項目の自由記述についてカテゴリー分析を行った。

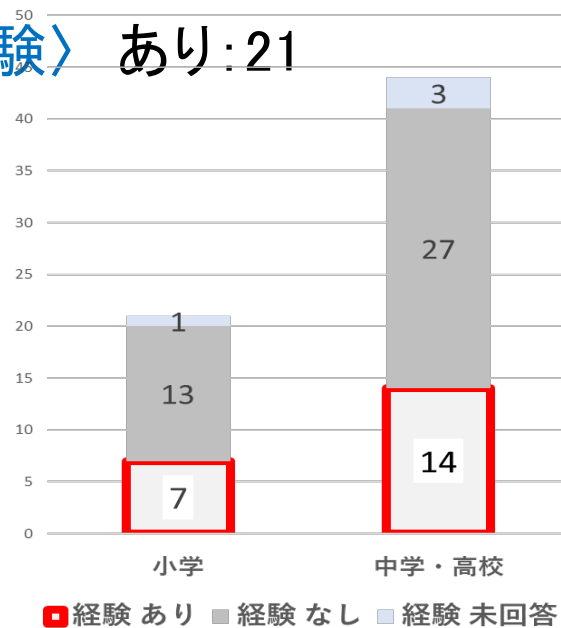
- ①がん教育は必要だと思うか
- ②がん教育で配慮してほしいこと
- ③がん教育についての意見

対象者の属性・がん教育の経験

子(小学生:21人,中高校生:44人)

〈性別〉小学生 男性:9, 女性12
中高校生 男性:13, 女性31
〈患者性別〉父親:20, 母親:45

〈がん教育の経験〉あり:21



親(55人)

〈性別〉 男性:7, 女性48 (87%)
〈患者の別〉患者:39, 配偶者:16
〈平均年齢〉47.8(±4.6)歳

〈がん種〉乳がん:26, 消化器がん:10

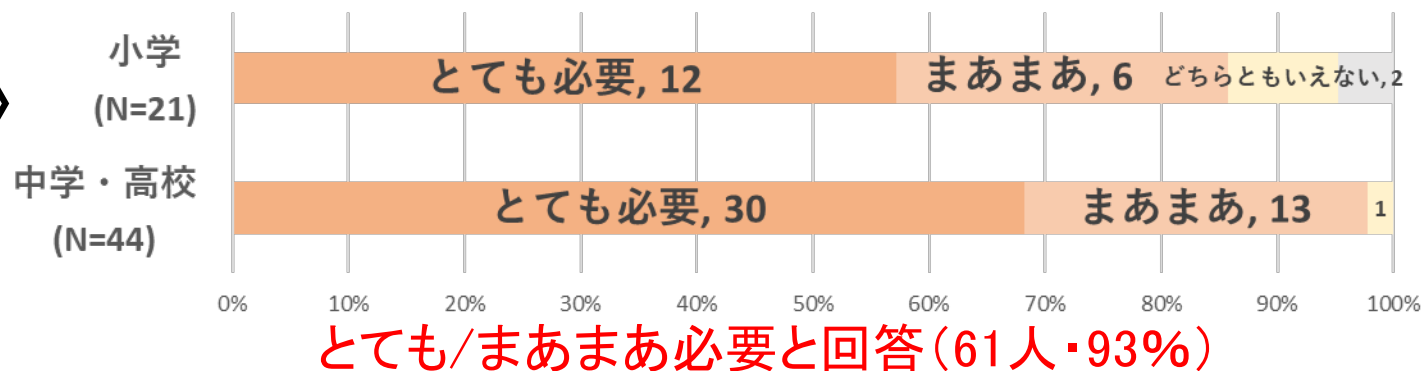
肺がん:6, 子宮・血液他:13

〈病期〉初期治療中:5, 再発・転移:12

経過観察:23, 死亡:13, 他:2

〈子のがん教育の経験〉あり:17

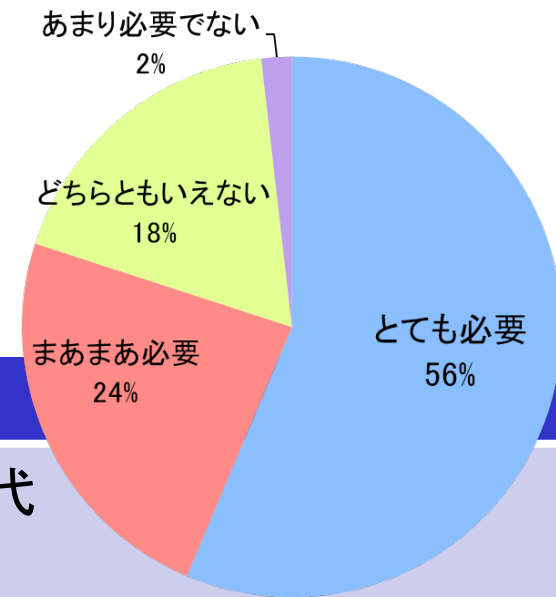
結果① 〈子ども〉 がん教育は 必要だと思うか



カテゴリー	具体例
がんという病気を知る必要 (27件)	・社会全体で患者やその家族を支援するには、がんという病気への理解が必要だと思う
自分や家族のためになる (10件)	・自分や身近な人ががんになった時の心がまえを学べる
誰でもなる病気だから (12件)	・誰もが触れるようなことがある病気だと思うから ・がんで苦しむ人がそれなりにいるから
不安にならないため (5件)	・いつ自分になるかわからないがんについて知っておけば少し気も楽になると思う
予防や早期発見につながる (7件)	・がん患者を減らすために予防という観点からがん教育を実施することはよい事だと思う

結果①〈親〉 がん教育は必要だと思うか

とても/まあまあ必要と回答(44人・80%)



カテゴリー	具体例
誰もががんになる時代 (16件)	・2人に1人ががんになる時代
誤解や偏見の解消 (4件)	・偏見や誤解があるため ・親ががんということで差別されることが減ると良い
正しい知識が必要 (15件)	・家族／自分のために正しい知識を身につけるべき ・子どもが病気を理解することで子ども自身の日常生活を保つことができる
支え合いや思いやりのある 生き方(7件)	・支えあったり、孤独感は軽減したりする ・他人に思いやる心が必要 ・子どもの教育を通して親も自分事としてとらえることができるようになる

結果② 〈子ども〉&〈親〉 配慮してほしいこと

〈子〉 カテゴリー	具体例 (質問の意図とズレあり)
親子で話をする事(2件)	<ul style="list-style-type: none">・親は子どもにもっと自分の気持ちを伝えていい・母は入院前にがんや治療のことを話してくれていた
特になし(4件)	<ul style="list-style-type: none">・普通に生活してほしい・母は入院する前に私に伝えるべきことを話してくれていたなので、それ以上に特になし
〈親〉 カテゴリー	具体例
子どもへの配慮(5件)	<ul style="list-style-type: none">・聞きたくない子への配慮・家族にがん患者／親を亡くしている子への配慮
親への配慮(6件)	<ul style="list-style-type: none">・事前に授業の内容を親に知らせる
授業内容についての配慮(4件)	<ul style="list-style-type: none">・「生活習慣が悪かったわけでもないこと」・「がん＝死ではないこと」を伝えてほしい

結果③ 〈子ども〉がん教育について(1)

カテゴリー	具体例
がんの親を持つ子どもに必要(4件)	<ul style="list-style-type: none">・病気に対する考え方、親への気持ちなど、少しでも変化があると良いと思うので、がんの親を持つ子どもには一度は経験してほしい・がん教育をより多くの人を受けられるよう、機会をどんどん増やしてほしい
知らない人に必要(6件)	<ul style="list-style-type: none">・聞いたことがない人、聞く機会がない人のために「がん教育」は必要。まだ身内にいない人でも、これからなる可能性だってある・知らなかったことや患者になった人の気持ちを知れた
子どもに配慮してほしい(7件)	<ul style="list-style-type: none">・がん教育の内容として、少なくともがんに罹患した親を持つ子どもが1人じゃないと思えるような内容で行うことが望ましい・がんの親を持つ子どもの気持ちを知ってほしい

結果③ 〈子ども〉がん教育について (2)

カテゴリー	具体例
正しい知識(11件)	<ul style="list-style-type: none">・がんの予防に加え、罹患してしまったとして心身共に健康でいるにはどうするべきかなどを伝えるべき・家族ががん患者なった場合、どんな風に生活が変わるかも教えるべき・インターネットで間違った情報を信じないようにきちんと教育すべき・よく知っている人に、わかりやすく教えてほしい
がん教育の時期(6件)	<ul style="list-style-type: none">・幼稚園の時から少しずつ授業の中で話してほしい・もっと長い時間をかけて丁寧にやってもいい・実際にがんになると大変だと思うので、中学生や高校生などは少しは知っていたほうがいい・小・中学校で行うべき

結果③ 〈親〉ががん教育について(1)

カテゴリー	具体例
子ども(親)への配慮 (21件)	<ul style="list-style-type: none">・家族ががんであることを言えずに生活している子が多い。他の子とは違う心情を思いやってほしい・教育も大切だが、その上で誰にも相談したり、こぼせる人がいない子がほっとしたりできる場所があったらよい
がん教育への期待 (10件)	<ul style="list-style-type: none">・「がん教育」がきっかけで、親子関係が変わるきっかけになればいい。ママ友の理解も得られたらうれしい・「よい形でのがん教育」を行えば、この先情報をアップデートしてしなやかに対処できる
授業内容の統一(4件)	<ul style="list-style-type: none">・資料は各学校に任せるのではなく、専門性のある方が協力してまとめたものを全国で一括して使用してほしい
偏見や誤解をなくしてほしい(3件)	<ul style="list-style-type: none">・がんに対する偏見をなくす、がんにならにように気を付けるとい教育はあったほうがよい・タバコや食生活が「原因」と強調するのは疑問

結果③ 〈親〉がん教育について(2)

カテゴリー	具体例
がん教育の実施方法 (2件)	<ul style="list-style-type: none">・子どもの年代ごとで少しずつ学ぶべき・親子や地域の大人・子どもなどと共に「がん」について知る機会があると良い
正しい知識が必要 (4件)	<ul style="list-style-type: none">・がん教育で正しい知識を持つことで、不安が解消され、何でも前向きに質問できる様になった・身近な病気なので、子どもであっても知ったほうがよい
がん体験者の話について(5件)	<ul style="list-style-type: none">・できれば小学生から大学生の子どもがいるサバイバーの体験談を耳にしたほうがよい・生活信条、様式など偏った内容を子どもたちに話されていることが気になった
全員には必要ない (8件)	<ul style="list-style-type: none">・がんになった親を持つ子どもへの配慮を考えると一律の学校現場での”がん”に特化した教育はしない方がよい・親がすでにがん患者であったり、他界している子どもにとっては意味があるのか

考 察

がん教育の必要性と配慮

- 子どもの93%が必要と回答。
- 「がんを知る必要」「誰でもなる病気」「自分や家族のため」「予防や早期発見につながる」「不安にならない」等、がん教育のメリットに言及し、その必要性を理解していた。
- 子どもは、“学校での配慮”よりも、“家庭での配慮”について言及し、親子間での話し合いを望んでいた。
- 当事者である親の80%が必要と回答。
- 「誰もがががんになる時代」「正しい知識が必要」「偏見や誤解の解消」等の必要性が挙げられる一方で、「正しく伝えてくれるか不安」といった懸念もうかがえた。
- 親は、子への配慮、事前の周知、授業後のフォロー、偏見につながらない授業内容等、さまざまな配慮を望んでいた。

考察 がん教育に望むこと

- 子どもは、がん教育を通して、正しい知識を得て、自分の親のがんを理解したいと思っている。その上で自分の親とがんについてコミュニケーションをしたいと望んでいる。
- さらに、子どもは、周りの人にがんについて知ってほしい、がん患者・家族への理解が深まる社会になってほしいと願っている。
- 子どもよりも親のほうが、がん教育ががんの家族をもつ子どもに与える影響を心配し、さまざまな配慮を望んでいる。
- がん教育実施に当たっては、学校での配慮と並行して、「がん教育」をめぐる親子のコミュニケーションを促進・支援していくことが必要である。
- 〈研究の限界〉 調査数が少ないこと、(親の)協力同意を得られた方(子ども)の認識であること等が挙げられる。

第27回日本緩和医療学会学術大会

COI 開示

演題名：がん教育に関する当事者の意識調査
～子どもと親の意識の比較～

発表者名：小林真理子、井上 実穂、白石 恵子、大沢かおり

演題発表内容に関連し、
主発表者及び発表責任者には、
開示すべきCOI 関係にある企業等はありません。